



# トランス・アトランティック物語

## ヨーロッパ・コレクションのなかの古代メキシコ工芸



落合 一泰 (COE共同研究員 / 一橋大学大学院・教授)

### 1 珍品奇物陳列室

「紳士たるものは、」と16~17世紀のイギリスの哲学者フランシス・ベーコンは次の4条件を挙げた。第一に完璧な蔵書を備えること。第二に素晴らしい庭園を造ること。第三に珍しい天然物・人工物を集めた展示棚をもつこと。そして、第四に心地よい静かな家に住み 賢者の石 をもつこと。『ハリー・ポッター』ブーム以来、四番目に話題性があるかもしれないが、当時ほどの条件も大切であり、じっさい、すべてを満たそうとする人が大勢いた。

16世紀以来、ヨーロッパの王侯貴族のあいだでは珍品奇物コレクションを備えることが流行した。全世界から天然物(ナトゥラリア)や人工物(アルテファクタ)を集め、邸宅の一隅に飾りたいと願ったのである。いわば世界のエッセンスを家に備えるのだから、その社会的prestigeも高かった。近代博物館の起源は、この種の珍品奇物陳列室(ヴンダーカンマー [驚異の部屋])にあるといわれる。この趣味は次第に富裕市民層にも広まった。ベーコンの挙げた第三条件とは、このブームのイギリス版である。

この種のコレクションでは、アステカ工芸など古代メキシコ文明の遺物が珍重された。古代メキシコといえば、ピラミッドや石碑が名高い。しかし、人々は多くの工芸分野で旺盛な創造力を発揮し、独特の美をたたえた完成度の高い製品を生み出していた。絵文書、武具、金銀や貴石や羽毛の細工、織物、木工、土器など、枚挙にいとまがないほどである。16世紀初頭の征服以来、おびただしい数のそうした工芸品が戦利品ないし献上品として大西洋を越え、ヨーロッパのコレクションに加わっていった。

### 2 ヨーロッパ人の見たアステカ工芸

メキシコの工芸品は、大航海時代のヨーロッパ人の目に、どのように映っていたのだろうか。スペイン国王カルロス一世(神聖ローマ皇帝カール五世)は、手に入れた工芸品を国内のみならず支配地ブリュッセルなどでも誇示してみせた。それに強い印象を受けたひとりが、画

家アルプレヒト・デューラーである。1520年8月にブリュッセルでこの宝物を目にしたデューラーは、日記にこう書いている。

「私は新たな黄金の国から王に捧げられた品々を見た。それらは幅が両腕を広げたほどもある全部黄金の太陽、おなじ大きさの純銀製の月、その土地の人々の鎧二部屋分、あらゆる種類の驚くべき武器、武具や投げ矢、じつに不思議な衣服、寝具など人間が用いる素晴らしい品々であり、すべてが驚きを飛び越えていた。貴重なものばかりで、何万フロリンもの値がつけられていた。私の心がこれほど魅了されたことは、かつてなかった。というのも、それらが並外れて芸術的な作品だったからである。私は遠い土地の人々の神秘的才に驚愕した。それらを前にして心に浮かんだことを言葉にするなど、私には到底できない」。

デューラーは金細工職人の息子だったから、アステカ人の巧みな手工芸に心を大いに動かされたのだろう。画家デューラーのこと、さっそくスケッチしたにちがいない。だが惜しいことには、今日その断片すら残っていない。それでもデューラーは、この一文だけで、金銭的な価値を超えたアステカ工芸の完成度に感嘆した様子を描ききっている。

イタリア出身の歴史家・地理学者ピエトロ・マルティエーレ・ダンギエラも、1519年にセビリアに陸揚げされたアステカ工芸品、とくに羽毛工芸に息を呑んだひとりである。

「私がすばらしいと思う黄金や貴石でさえ、羽毛細工職人の才覚や技能にくらべたら、その足元にも及ばない。その技芸は素材の価値を大きく上まわっており、私をいたく驚かせた。私は一千点もの細工を吟味したが、それをどう表現したらいいのか分からない。美で人間の目をこれほど楽しませるものを、私はこれまで見たことがない」。

マルティエーレはトルコ石のモザイクを施したマスクにも目を丸くしている。

「私たちは素晴らしく手の込んだ面にも驚かされた。本

体は木製で、石で覆われている。石は熟練の手わざで完全につなが合わされているので、継ぎ目を爪で探り当てることさえ不可能だった。肉眼には、まるで一個の石のように見えるのだ」。

### 3 個人コレクションから博物館へ

アメリカ渡りのこれらの工芸品は、ヨーロッパの宮廷のあいだで取引され、交換され、また婚礼の持参金の一部として贈呈されていた。しかし、長く大切にされたかといえば、そうとは限らなかった。コレクターが見飽きてしまうと金銀は鑄つぶされた。上質の羽毛工芸からは、貴族の帽子や馬のたてがみを飾るため、美しい羽根が一本また一本と抜き取られていった。トルコ石を象嵌したモザイク面からは高価な石だけえぐり取られ、ときにはすりつぶされて絵の具の材料に使われた。

そうした人為的な破壊よりさらに強力なシュレッダーがあった。忘却と無関心である。異国の珍品も、当初の好奇心が薄れると人手に渡り、部屋の一隅で埃まみれになった。そして人知れずゴミとして捨てられ、記録からも姿を消していったのである。

だが、ごく少数ではあるが、そうした破壊や散逸をまぬかれた古代アメリカ工芸品が、ヨーロッパの博物館や個人コレクションなどに残されている。

ウィーン民族学博物館にある、ケツアル鳥の長い尾羽をふんだんに使った深緑の羽毛の頭飾りの場合、メキシコから大西洋に船出してヨーロッパに渡り、イタリアかネーデルランドのコレクションに収められたあと、南ドイツのコレクターの手に渡り、その後チロル山間のハプスブルク家コレクションに加わった。そして、長く忘れ去られていたところを再発見され、19世紀にウィーンへ。アステカの羽毛の頭飾りは、世界にこれ一点しか現存しない。

ロンドン・大英博物館で異彩を放つ人間の頭蓋骨。トルコ石のモザイクがその表面を隙間なく覆っている。他にほとんど類例を見ないアステカ工芸だが、ベルギーのコレクションに収められるまでの経緯は不明である。それが19世紀に競売にかけられたとき英国人が買い、のちに大英博物館に遺贈された。

1519年、アステカ王は、征服者コルテスにお引取りを願ってたくさんの贈り物をした。それがわずかながら残っている。たとえばモザイク・マスクやナイフの柄の一部は、16世紀にはポーロニャやフィレンツェのコレクションにあった。しかし、その価値は時間とともに忘れ去られ、19世紀後半に首都ローマの博物館に譲渡されて現

在に至っている（表紙写真参照）。移管されたときの状態はひどかったらしい。

ところで、上述のウィーンの頭飾りを含め世界に6点しか残っていないアステカ羽毛工芸のひとつが、メキシコ国立歴史博物館にある。羽毛の盾なのだが、アステカ時代からずっとメキシコで保管されてきたのではない。1864年、ナポレオン三世のさしがねでハプスブルク家マクシミリアン大公がメキシコ皇帝に即位したさい、オーストリアの実家のお蔵から取り出してメキシコ国民への土産として持参したのである。盾にしてみれば、ヨーロッパに渡って300年あまり後の里帰りだった。

### 4 時空を旅する工芸品

16～17世紀にヨーロッパに渡ったこれらの品々は、生まれた土地や時代から切り離された、特異な工芸品である。作られた場所の文脈に戻して語りたくても、分からないことが多すぎる。貴重で類を見ない美術工芸品であるため、研究者といえども手にとって検討することはまず許されない。正確な出自が不明なうえ、似たものが発掘されることもないため、考古学者はこれをどう扱っていいのか思いあぐねてきた。

しかし、出生証明書だけがその工芸品の価値を決めるわけではあるまい。生まれ故郷から切り離されてヨーロッパに渡り、人々の耳目を集め、そして忘れ去られていった履歴そのものも、その工芸品の生きた価値だと思う。これら 旅する工芸品 を特別視せず、その足取りを素朴にたどってみたい。散逸してしまった工芸品は、路傍の骨となった旅人であろう。ならば、その生前の姿を少しでも明らかにしておきたい。そうした研究から、古代メキシコ工芸品を媒介としたトランス・アトランティックな文化関係史が浮かび上がってくるのではないかな。

コレクションや博物館は、モノをその本来の文脈から逸脱させることで成立する。もとの脈絡で生きたなら、モノは腐ったり壊れたり灰になったりして、自然に寿命を終えてしまうからである。16～17世紀ヨーロッパのコレクションでは目録作りが重視されたが、それでも散逸や腐朽がしばしば起きた。しかし、徹底した管理技術と保存科学の発達とともに、博物館の収蔵品には寿命がなくなった。死ななくなったのである。古代メキシコ工芸品は、生まれた時代や場所から遠く離れた展示ケースや収蔵庫のなかで時間を超えていく。それは、トランス・アトランティックな旅とはまた別の、果てしない旅のようにも思われる。